

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2017～2019

課題番号：17KT0144

研究課題名(和文)中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的实践に関する研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on Poetic Orality: Cultural Succession and Creative Practice in Tai Society of Southwest China

研究代表者

伊藤 悟 (ITO, SATORU)

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・外来研究員

研究者番号：90633503

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国西南タイ族地域における声と文字の文化の伝承活動について参与観察し、これまで感覚的に共有されてきた詩的オラリティが客観化される過程と、その伝承体系が革新される過程を考察した。詩的オラリティは、当事者がお互いの実践について再帰的批判を行う中で、伝統文化として規範化されていった。その結果、詩的オラリティは道徳的・宗教的・美的価値観を経験させる生活芸術として、また、より良い社会をつくるための日常美学として再評価されていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

声や文字の文化をめぐる伝承活動では、モノとして歌の録音や文字テキストの収集、保管について社会的意義が強調されきた。しかし、実際にそれらを用いる人々の主体性は軽視されがちであった。当事者の実践の「いま・ここ」に着目する本研究のような人類学的研究は、声や文字の文化が独特な身体技法と創造的感性をともなう行為の一形態であることを改めて明らかにした。この研究過程と学術的成果は、当事者の活動と相関しており、当事者たちにフィードバックを繰り返すなかで知見と比較の視座を提供し、伝承方法の革新に直接的・間接的に寄与した。

研究成果の概要(英文)：Using a case study based on participant observation of private study groups of oral and literal culture in Tai minority society of southwest China, this study explored the objectification process of a poetic orality which people unconsciously learned within society and the innovation process of its succession-system. Intellectuals had standardized their poetic orality as a traditional culture while reflexively criticizing each other's oral and literal practices. As a result, poetic orality was reevaluated as a living art to experience moral, religious, and aesthetic values, and as everyday aesthetics to create a better society.

研究分野：文化人類学

キーワード：詩的オラリティ 声と文字 感性 タイ族

1. 研究開始当初の背景

中国西南の少数民族社会では、最近まで即興的に詩を歌い交わす掛け合い歌や、歴史叙事詩の語り、霊媒師の交信の歌、詩文形式の宗教テキストの創作や朗誦などの文化的コミュニケーションが日常生活に根付いていた。しかし現代化と漢文化の影響によって、伝統的な声と文字の文化は廃れつつあった。雲南省徳宏州のタイ族村落では、近年になって各地の村の知識人らが古書物の解釈や朗誦、聴取の技法、新文字への翻訳などを討論し、その議論の過程を視聴覚メディアに記録するといった草の根の伝承活動を始めていた。

これまでの学術的研究において、声と文字の文化、あるいは口承文化と書承文化の研究は、主に発せられた、あるいは書かれたテキストを対象に展開されてきた。そのため、当事者の主体的側面、すなわちテキストをめぐる「いまここ」における即興的、身体的な実践についての十分な研究がなされてきたとは言い難い。一方、人類学的研究では、書かれたテキストや口承テキストを人々がいかに用いるのかという文化的活動に着目した研究が行われ、世界各地の声や文字の独特な運用形態や社会的機能が明らかにされた。しかし、こうした研究においても、詠み手や聴き手に世界を情動的に経験させる感性の側面や身体技法に関連する研究は十分ではなかった。

実際にモノを中心とする文化復興や保存事業では、声や文字の文化を媒介する感性や身体技法に関する問題が軽んじられる傾向にあった。声と文字の文化の伝承に取り組む当事者にとって重要なことは、書かれたり、歌われたりするテキストをモノのように収集したり、記録したり、保存したりすることではなく、それらを楽しむ、創造する感性や技法をいかに継承するかが問題となっていた。

2. 研究の目的

本研究では、声と文字をめぐる先行研究の成果を踏まえ、これまで除外されてきた当事者たちの感性的経験に着目しながら、詩文形式のテキストを歌い、詠み、書き、聴き、創るという文化的コミュニケーションの技法と能力を「詩的オラリティ」と捉えた。その詩的オラリティの実践の場を参与観察調査の対象とし、具体的に中国西南のタイ族地域にて声や文字をめぐる伝承活動を事例として取り上げた。本研究の目的は、人々がいかにしてこれまで感覚的に共有してきた詩的オラリティを意識化し、伝承体系を革新しようとしているのかを解明し、社会生活における詩的オラリティがいかにローカル社会の形成や存続にとって重要であるのか、社会的意義を再考することであった。

3. 研究の方法

本研究は、先行研究では見落とされてきた、テキストを書き、詠み、聴き、創る、人々の実践の即興的側面、感覚やイメージを経験したり表現したりする文化的感性、社会や生活環境、これらの相関に着目して調査し、詩的オラリティの特徴について考察を行った。

具体的な研究方法として、人々の伝承活動の現場にて参与観察を行い、身体的実践の諸相や、感性的経験の言語化、詩的オラリティと日常生活との相関、そして声や文字の技法や実践の歴史的变化について民族誌データを収集した。同時に、当事者が議論する書かれたテキスト(仏教経典、祝詞、古文学など)や、即興で生み出されるテキスト(歌や祝詞など)について、インフォーマントの協力を得て調査者も精読し、朗誦や歌い方を学び、その経験も現象学的データとした。当事者によるテキストに関する説明や解釈、比喩的表現などに参照・活用される社会的事象に関する調査も行い、生活環境や空間に履歴のように刻まれ、読み取られる詩的オラリティを把握した。伝承活動の現場において、映像機器や録音機器を用いて実践の諸相を記録し、当事者にフィードバックして議論し、詩的オラリティの意識化プロセスについて考察した。

4. 研究成果

本報告書では主に以下の5点について民族誌的記述を中心に報告する。

調査地における声と文字の文化的背景

雲南省西部の徳宏タイ族社会では、文字は主に上座仏教の宗教実践において用いられ、僧侶や出家経験者、知識人などごく一部の男性によって受け継がれてきた。現在も使用されている古い文字システムは、声調や母音の表記が不完全であり、習得は容易ではなかった。くわえて、あらゆるジャンルのテキストは、歌や口頭の祝詞などと同様に詩文形式で書かれており、文章を読み、理解するためには前後の文脈から適切な単語を推測する必要があった。

非識字者の多い村落社会では、声を視覚化した文字の内容を共有するためには、文字を再び声へ変換し、聴かれる必要があった。あらゆる文字テキストは音楽的な節回しを用いて朗誦されるため、声の美的表現も重視された。しかし、宗教テキストのような推敲された詩文の聴取には、聴く練習と豊富な民族知識が必要であった。そのため、人々は日常生活のなかで掛け合い歌や様々な儀式で用いる祝詞、霊媒師の交信歌などを多く聴き、また自ら歌い、唱え、会話のなかで韻文形式のレトリックを慣習的に用い、詩的オラリティを高める必要があった。このように、声

と文字の文化は、個人の生活経験に根差した多様な身体性と社会関係性に支えられて実践されてきた。

草の根の伝承活動

近年、急変した生活と漢文化の影響によって伝統的な声と文字の文化は継承が危ぶまれていた。これまで伝統文化の保護や振興は、行政や研究機関が主導し、歌の録音や古文書の収集と保存に偏っていた。しかし民間では、声や文字のテキストを扱う身体性や感性の継承を目的とした草の根活動が展開されるようになった。その一つが、各地の村の知識人たちを招集して定期的に開催される「徳宏州タイ族古文学老人学習班」であった。

この勉強会は現状に対する危機感から発足した。手書きで写された古文学や経典をひらくと、書き手の能力低下によって書損が散見されるようになった。最近では手書き経典をコピー機で印刷した冊子が流通するようになったが、そもそも原本にある書損の多さが問題視されるようになっていた。また、こうしたテキストを朗読する村の知識人の、書損を判別する知識不足や、声の技法レベルの低下も憂慮されるようになっていた。声の文化においても、言葉の乱れが起きており、詩や歌の表現力が低下していた。

勉強会では、詩的オラリティの矯正あるいは伝承システムの革新のために、1950年代に発案され村落社会では普及しなかった新文字を積極的に活用していた。また、デジタルメディアやSNSを通じて成果を公開、配信するなどの試みも議論されていた。こうした新たな試みは若い世代の参与の増加が影響していた。

老人たちの草の根活動は噂で広がり、若い世代、特にラジオ局やテレビ局、芸能関係の従事者たちの関心を集めた。伝統的な伝承環境から外れてしまった中年・若者は詩的オラリティが著しく低下していたが、国の民族文化称揚政策や、隣国ミャンマーのタイ族文化復興・仏教振興の影響を受け、声と文字の文化をタイ族アイデンティティのよりどころとみなすようになっていた。

詩的オラリティの客観化と規範化の試み

徳宏地域では男子の出家は非常に稀であり、文字の修得は個人の自発的な学習によるものだった。男性識字者のほとんどは、若いころに興味から文字の基礎を長老から学び、労働のあいまに古文学や経典を写本し、やがて村の在家信者代表として仏教儀礼の指揮を執って経典の朗読を行うといった経験を重ねていた。聴き方と同様に、書物の写本や朗読は、身体技法であり、自らの身体をもって模倣と反復を通じて身に着けるものだった。

勉強会では、「反」伝統的な伝承システムが模索された。それは暗黙知である伝承システムを、再帰的な批判と実践から規範化しようとする試みであった。このために、知識人たちは独自に修得した詩的オラリティとそれを用いる身体技法について、意識的に相互に批判するという方法を取り、無自覚に実践されてきた詩的オラリティを反省的に見つめなおした。議論の場では、他者には説明などしたことのなかった独自の朗読テクニックやコツ、詩的表現の解釈などが明らかにされていった。

特に、音楽的な朗読が詩的オラリティの伝承に弊害となっている側面が問題視された。対外的な民族表象の文脈では、朗読技法は伝統文化という「正」の実践として特別視される傾向にあった。朗読は、テンポよく声を途切れさせないように、かつ美的に表現することにより、聴衆による円滑な理解と、共感や同情を引き出すという機能があった。しかし、この朗読技法にも「負」の側面があった。例えば朗読では、文字テキストの書損や意味不明の内容があっても、それらを有耶無耶にして「それらしく」声に変換して誤魔化すこともできた。勉強会では、多くの知識人がこうしたテクニックを多用していることが問題視された。その根本には、文字テキストの書損を訂正しない習慣、あるいは訂正する知識や能力が不足しているという原因があった。

問題解決の方策として、古文字の経典や古文学を、完全な表音システムに改良された新文字に翻字し、かつ書損の校正や、パーリ語や古語の注釈をつけることや、文字や映像による教材作成などが試みられた。ただし、古文字を新文字に翻字すると、地域間の方言を表記的に統一することになってしまった。古文字のテキストを声へ変換する身体技法は、地域によって方言のように差異があった。そこで、方言や地域ごとの朗読旋律の特徴を伝承するためにも、新文字テキストを「異なる地域の朗読技法に変換して読む方法」を教授する必要も生じた。

日常性の美学としての詩的オラリティ

暮らしの中で生きている声と文字の文化は、声と文字を用いる身体的実践であり、生活を創造する「存在のための文化」であった。歌や祝詞、文字テキストの朗読などの核である詩的オラリティは、タイ族の人々が歴史的に培ってきた「世界の感じ方」を、美的で情動的な体験のなかで共有可能にしてきた。詩的オラリティは、言葉による詩文や詩的表現そのものであったり、声や楽器で表現される音楽的旋律でもあった。詩的オラリティは日常生活のいたるところに、あたかも経験の履歴のように刻まれ、人は状況に触れると詩的オラリティを想起するのだった。村や自然の景観、環境を構成する布置された様々なモノ、慣習的行動、人と人、人と動物や霊、自然との関係性、これらは詩的オラリティによって美的に言語化され、味わわれる。人々は詩的な言葉が喚起する世界イメージを通じて現実をそのように認識し、あるいはそのように作り替えようとつとめてきた。詩的オラリティは本来、経験や感情を消費するのではなく、生成の技法として娯楽や宗教、道徳教育などに用いられていた。いわばより良い生活を生きるための実用的な日常

美学として練り上げられ、受け継がれていた。

今後の課題

マイノリティ社会の声と文字の文化は、主流社会の統治体制の進展にともない従来の伝承システムを維持できず、変化を余儀なくされている。その変化が受動的か能動的かは、国家や地域により異なる。本研究ではトランスナショナルな動向と比較のためにタイ北部でも調査を行い、政府や宗教組織と民間の関係性のあり方によっても伝承システムの革新の方針が異なっていることなどがわかった。

中国側タイ族地域にて現在取り組まれている草の根伝承活動は、タイ王国北部では半世紀以上前にすでに実施されていた。タイ王国北部のランナー文化圏では、1950年代より出家経験をもつ2名の知識人が、半生をとおして1000冊以上のタム文字文書を公用文字のタイ文字に翻字・編集していた。かつてランナー王国ではタム文字によって仏教などの宗教経典や文学作品が記録されてきた。しかし、タイ王国の国家統一が果たされたのち、1930年代より標準語教育が全国の学校や仏教寺院において実施されると、タム文字は使用されなくなった。1950年代、ブンキット師とタヴィ師はランナー文化が消失の危機に瀕していることを憂い、高僧らと協力して翻字活動を行い、印刷会社を設立して複製経典の販売を始めた。近年では、若者が中心となったランナー文化の復興がめざましく、書の芸術といった新たな創作活動も起こっている。こうした動向はインターネットや人の移動によって中国側にも影響を与えている。

ミャンマーのシャン州を中心とするタイ族地域でも、文字文化の復興が上座仏教の普及活動と共に積極的に推進されている。特に、タイ族高僧による上座仏教実践の規範化活動は、中国側タイ族の仏教実践にも多大な影響を与えるようになっており、規範を求めて国境を越えた人々の往来が活発になっている。また、タイ北部まで出稼ぎにきたミャンマー籍タイ族たちがシャン文字(タイ族文字)や芸能の伝承活動を積極的に組織している。

今後の課題として、中国、ミャンマー、タイにおけるタイ族社会間の比較研究を行い、それぞれの地域における詩的オラリティをめぐる伝承活動の相互関係性や独自性を明らかにしたい。この研究計画は2020年度に新たに取得した若手研究「日常を美学化する詩的オラリティの人類学 - タイ文化圏の声と文字の文化の比較研究」において遂行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤悟	4. 巻 231
2. 論文標題 徳宏タイ族社会における詩的オラリティの伝承活動 - 女性詩師ワン・シャンヤーの取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学 『中国雲南の書承文化 - 記録・保存・継承』	6. 最初と最後の頁 54-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤悟
2. 発表標題 雲南における映像メディアのもう一つの潮流 - 少数民族の自主制作映像と流通（2000～2015年）
3. 学会等名 科研費若手研究（B）「中国ドキュメンタリー映画批評の空間およびネットワークの構築」主催 国際ワークショップ「中国ドキュメンタリー映画の歴史と現在」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤悟
2. 発表標題 コミュニケーションに用いられた織機の音 - 中国雲南省徳宏州タイ族社会の事例
3. 学会等名 京都市立芸術大学芸術資源研究センター 記譜法研究会企画「糸が紡ぐ音の世界」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤 悟
2. 発表標題 タイ王国チェンマイ県の歌師チャンソーの取り組み 即興歌謡ソーの学習と教授方法を中心に
3. 学会等名 東洋音楽学会西日本支部例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤 悟
2. 発表標題 徳宏タイ仏教文書『リークヤート』をめぐる実践の現状
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究『中国雲南におけるテキスト研究の新展開』
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 伊藤 悟	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 418
3. 書名 カーム・ソンコーカオ - 徳宏タイ上座仏教社会におけるシャーマンの送霊うた	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【タイ語】第1回 ~タイ族のことばと文字~ http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/surugadai-selection/rensaio4 【タイ語】第2回 ~多様なタイ族~ http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/surugadai-selection/rensaio4 【タイ語】第3回 ~タイ族のうたと音の文化~ http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/surugadai-selection/rensaio4 【タイ語】第4回 ~タイ族文化の現状と継承への取り組み~ http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/surugadai-selection/rensaio4</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考